神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Apparent syllable fusion in Chinese : some phonetic changes going with lexicalization in nortern chin

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2000-11-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 太田, 斎, Ota, Itsuku
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1456

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

見かけ上の合音

——語彙化の音声的現れ——

太田　斎

1．前　言

通常，合音といえば「児化」がすぐに思い起こされる。今特に断らない限りは普通話を例にその発音をピンインで表記して説明することにしよう。「児化」とは語幹音節が後続の名詞接尾辞“兒”er〔ɚ〕を呑み込んで，韻母がそり舌音化する現象で，普通話の基礎である北京方言には珍しくない。この他，「児化」に似たものとして“裏”，“日”の特殊変化がからむものがある。前者の例としては，“這兒 zhèr”，“那兒 nàr”，“哪兒 nǎr”があり，それぞれ“這裏 zhèli”，“那裏 nàli”，“哪裏 nǎli”の“裏”が恐らくぞんざいに発音されて li → le〔lə〕→ er〔ɚ〕のように変化し，名詞接尾辞“兒”と同音になって混同され，「児化」と同じ音声的実現を呈するようになったものだろう。他の名詞に後続する“裏”がこのような変化を生じていないのはその複合語の使用頻度が低いからである。北京方言ということであれば，後者の例として“今兒箇”，“明兒箇”，“昨兒箇”，“後兒箇”がある。これらも本来“今日箇”，“明日箇”，“昨日箇”，“後日箇”であったものが，“日”がぞんざいに発音されて“兒”のようになって，「児化」と同じ音声的実現を呈するようになったものである。他の北方方言にはこれ以外に“白兒白天”，“幾兒甚麼時候”，“好兒結婚的日子”，“生兒生日”，“百歲兒百歲日”などといった例も見られる。この他，普通話に個別的な合音の例を求めると，“这zhèi”，“那 nèi”，“哪 něi”，“甭 béng”，“別不要 bié”，“倆 liǎ”，“仨 sā”などがあ

る。これらはそれぞれ“這一”，“那一”，“哪一”，“不用”，“不要”，“兩個”，“三箇”が約まったものと考えられている。“那 nài”，“哪 nǎi”，“甭 bóng”，“別不要 biào”，“倆 liè”，“仨 sè”のようになっていないのは恐らく一音節に約まる前の段階で，「軽読」によって双方の韻母に何らかの変化が生じていたためであろう。[1] 拼音符号からでは違いが分からないが，“这 zhèi”の è と“這 zhè”の è は表す音価が異なる。これは「音素配列論」(phonotactics) 上の制約によるものである。“甭 béng”が“甭 bóng”とならないことについてもまた，唇音声母と ong が結びつかないという音節構成上の制約によると見なせる。[2] これらの例は反切で求める字音を捻り出すのに似て，前の音節の声母と後の音節の韻母をくっつけることによって一音節が形成されていると見なすことができよう。

しかしながら語彙によってはこのような二音節が一音節に融合するという以外に，連音変化によって一方の音節の音声的外見にもう一方の音節の音声情報が加わったかのようになり，その結果もう一方の音節が相対的にその情報量を減じて「軽読」の度が進み，摩滅して軽声音節となりやがてはゼロになってしまうといったようなプロセスを経て最終的に一音節語になってしまうというようなこともある。或は連音変化の結果，形態素の切れ目に対する認識が曖昧になり，後続音節が衰弱したというべきかもしれない。これは以下に掲げる例から分かる通り，いわゆる「語彙化」(lexicalization)[3] の過程に他ならない。ただし本稿では専らその音声面の変化を取り上げ，機能面について詳しく論ずることはしない。音声面での共通性をあらかじめ指摘すれば，本稿中の挙例ではいずれも第一音節が「合音」の結果と同じか，それに近い音声形式を取ることになり，後続音節が摩滅している。

以下，北方方言の例に基づきこのような見かけ上の合音について具体的に検討を加えることにしよう。特殊な音変化を説明するに当たっては，様々な該当例を統一的に説明でき，かつシンプルな推定変遷過程を採用する。変遷過程は証明できないので，説明力の強さとシンプルさを検証手段として種々

の可能性のうち最上のものを選択する。現時点のデータのみからでは複数の可能性が存在して，ただ一つの変遷過程を提示することができない場合がある。このような現状を打開するには将来のデータの蓄積を待たねばならない。また複数の方言の反映を同一基準で扱うには若干の音韻論的処理を施して説明する必要がある。本稿での処理は基本的には注音字母の考え方をローマナイズしたようなものである。例えばɛ, ɑŋ, in, iŋ, yn, yŋ などを ai, aŋ, iən, iəŋ, yən, yəŋ などとしているのはその一例である。普通話の zi, ci, si; zhi, chi, shi, ri は声母のみで韻母ゼロと見なした方が連音変化を単純に捉えられる場合が多い。無声子音声母が声調を担うというような矛盾が生ずることになるのであるが，ここでは深く立ち入ることはしない。同様に韻母 -i, -u, -ü もまた介音のみと見なす（前二者については韻尾のみと見なす余地もある)。方言の例についても同様に処理する。もちろんこのような処理は，このような現実の具体的反映がそれぞれの方言の声母，韻母体系においてどのような位置を占めているのか考慮した上でなされねばならない。当面の方言例の所拠文献は全てを挙げると煩瑣になるので太田（1996a, b）に譲り，これに挙がっていないものについてのみ巻末に示すことにしたい。所拠文献の精度はまちまちであり，中にはピンインによって方言音を表記したものもある。これらについては国際音声記号と区別するために//で括って示すことにする。先に示した音韻論的処理を施した表記は//で括ることはしない。文中の中国語の語彙は“　”で括って示すが列挙する場合には“　”は付けない。“　”はまた本字であることを示すために使用することもある。一連の同源語彙を示す中国語語彙は‘　’で括って個別の方言語彙と区別する。体系的な音韻変化とは異なる個別的な変化を示すに当たっては→で示すことにしたい。→の左側の形式から右側の形式に変化したことを意味する。方言例の末尾に←“　”とあるのは左側の漢字表記が当て字であって，←の右側が本来の語源，つまり本字であることを意味する。

2 ‘来 往’

少なからぬ北方方言では概数を表すのに数字の後に‘来往’をつける。この‘来往’は直前の数字に重点が置かれるせいか，相対的に軽く発音されることが多く，その結果いわゆる「畳韻化」を起こしている場合がある。以下の例を参照されたい。cf.太田（1995a）p.127

山東新泰：二十來往 $ə l^{31} ʃ\wr^{42} lɛ^{0} uaŋ r^{0}$　二十左右　志164

cf. 十拉多箇 $ʃ\wr^{42\text{-}55}$ la^{0} $tuə^{213\text{-}211}$ $kə^{0}$　十多箇　志164

← “十來多箇”

山東平度：來往兒 $lɛ^{0} uaŋ r^{55}$　表概數：一年～　199

浪往兒 $laŋ^{0} uaŋ r^{55}$　199

cf. 十來年(兒) $ʃ\wr^{50\text{-}55}$ la^{0} niã(r)^{53}　十年左右　102

山東兗州：十箇來往 $sɿ^{42\text{-}44}$ $kə^{0}$ $laŋ^{312\text{-}31}$ $uaŋ^{0}$　十箇左右　857

河南商丘：來往 $laŋ^{42} uaŋ^{0}$　表約數，上下或左右。　簡釋 420

cf. “來” laE^{52}（陽平）　研究 9

河南夏邑：來［$laŋ^{53}$］往 —— 表示約數的詞尾　533

來往兒 $laŋ^{53}$ $uãr^{55}$　537

山東滕縣：三十郎伍 $sæ̃^{213} sɿ^{55} laŋ^{55} u^{0}$　三十多　572

山東莒縣：十箇郎五 $θɿ^{53}$ $kɤ^{0}$ $laŋ^{31}$ u^{0}　十来箇　志208

山東即墨：來往 $laŋ^{0}$（u^{0}）　左右　118；“來” $lɛ^{42}$（陽平）　22

山東沂水：来往兒 $lɛ^{53} uaŋ r^{21}$　表示二十以上的数目接近或稍微超出整数。174

郎往兒 $laŋ^{53}$ $uaŋ r^{21}$　174

来的 $lɛ^{53\text{-}24}$ tei^{0}　174

郎的 $laŋ^{53\text{-}24}$ tei^{0}　174

……

河南濟源：（三千）來往兒 $lai^{31} væ̃^{53}$　24

山東即墨の（u^{0}）は u^{0} があってもなくても良いことを意味する。河南濟源

の例をひとまず措いて，如上の反映を同じ傾向の変遷の様々な段階を示すものとして捉えるならば，三様の推定が可能であろう。その第一は以下のようなものである。如上の“兒”で表記される音節が本字であるかどうかは今問題にしない。とりあえず（r）と表記することでこの音節に対する判断を保留して，「児化」という言い方をしておく。以下本稿で扱う他の語彙についても同様である。

Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ
lai uaŋ(r)	→	laŋ uaŋ(r)	→	laŋ uə(r)	→	laŋ u(r)	→	laŋ
平度，新泰		平度，兖州；商丘，夏邑				滕縣，即墨，莒縣		即墨（，沂水）

ⅠからⅡへの変化は「畳韻化」，ⅡからⅢ，Ⅳ，Ⅴにかけての変化は韻母の弱化で，Ⅴの段階で後続音節が消滅している。これまでのところ筆者の調査ではステージⅢの実例が見出されない。或いはステージⅢを経過することなく次のステージへ移行したと考えるべきかもしれない。沂水の「郎的」は並行して存在する「来的」が「来往兒的」の中間音節の脱落であるとすれば，同様に「郎往兒的」の中間音節の脱落とみるべきかもしれない。となると上掲のⅢ，Ⅳの段階を踏んでいないことになり，上記の推定変遷過程から除外すべきものとなる。山東平度方言の“十來年(兒)”の“來”や新泰方言の“十來多箇”の“來”が［la］となっている点をも含めて統一的に解釈するならば，また以下のような過程も想定できる。

Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ
lai uaŋ(r)	→	la uaŋ(r)	→	laŋ uaŋ(r)	→	laŋ uə(r)	→	laŋ u(r)	→	laŋ

ⅠからⅡにかけて発音労力の節減によって先行音節韻尾の脱落が起こったとするものである。ただし今のところこの変化過程のⅡ，Ⅳの該当例はない。〔数詞〕＋‘來往’の“來”と〔数詞〕＋“來”の後に更に名詞若しくは数量詞が後続する場合の“來”とでは変化の現れ方が異なるのかも知れない。第三の推定は第二の推定に似るが，音節構成要素の転置があったとする見方である。

Ⅰ　　Ⅱ　　Ⅲ　　Ⅳ　　Ⅴ　　Ⅵ

lai uaŋ(r) → la uaŋ(r) → laŋ ua(r) → laŋ uə(r) → laŋ u(r) → laŋ

ⅡからⅢへの段階で韻尾の転置が起こっている。ただしこの推定ではⅡ，Ⅲ，Ⅳの該当例がない。如上の例のみに基づく限りでは，報告例のない形式をより多く設定しているので，説明力の強さという点で前二者に劣るといわねばなるまい。上記の推定変化過程のいずれが正しいか，現時点ではデータが不十分である。'來往' の例に関して言えば，後続音節が「軽読」されて，漸次ゼロへと向かう過程を想定できよう。河南濟源の例は所拠文献に "往" の字音が載っていないが，同音字であるべき "枉" が uaŋ^{53}（上声）となっているところから見て lai uaŋ → lai uan → lai van 若しくは lai uaŋ → lai vaŋ → lai van のような特殊変化を想定できる。韻尾 -ŋ → -n の変化と合口介音が声母となる変化（-u- → v-）の先後関係が分かればこの推定変遷過程の一方を排除できる。そのためには周辺の方言のデータの蓄積を待たねばならない。どちらであるにせよ不完全な「畳韻化」が生じていると見ることができよう。ただし u 介音が声母 v に変わる理由は今のところ説明できない。

3．'因　為'

河南開封：因為 iŋ^{24} uei^{0}　　省志234　（＝河南商丘　省志234）

河南新郷：因為 iŋ^{53} vei^{0}　　省志234

江蘇徐州：擁 yŋ^{213}　　因為　　248

　　因為 iŋ^{213} uə̃^{0}　　51

河北棗強：□□ Øyŋ Øiy　　因為　　879

山東鄒城：依為 i$^{213\text{-}211}$ uei^{1}/uə̃^{0}　　因為　　785

山東臨清：擁 yŋ^{323}　　145

　　擁五 yŋ$^{323\text{-}34}$ u^{55}　　145

山東德州：因為 yŋ$^{213\text{-}23}$ vẽ^{0}　　176

山東聊城：用故 yŋ$^{13\text{-}131}$ ku^{0}　140

yŋ$^{13\text{-}131}$ u^{0}　140　←“因為”？

内蒙興安：擁故/ yōngggu/　因為　1055

河南夏邑：(是) 擁擁 yŋ^{214} yŋ^{0}　表原因　538

河南林縣：為 vei^{31}　省志234

これらの例もまた以下のような変遷過程の諸段階を示すものと解釈できる。

I	II	III	IV	V	VI	VII
iən uəi →	iəŋ uəi →	iəŋ uən →	yəŋ uən →	yəŋ uə →	yəŋ u →	yəŋ
	開封,(新郷)	徐州	德州		臨清,(聊城)	臨清,徐州

河南新郷の“為 vei”は通時的には uəi より変化したものだが，uəi＞vəi の音韻変化がステージⅠからⅡへの変化の後に起こったものであるかどうかなお検討の余地がある。uəi＞vəi の音韻変化が早くに起こっていたのであれば，iən vəi → iəŋ vəi の変化を考えねばならなくなる。或いは iən vəi → iəm̃ vəi (→iəŋ vəi) といった過程を想定すべきかも知れない。今，第三段階を（　）で括って示したのは，第二段階から第三段階への移行が，第二段階に見える iəm̃ が単字音系にない形式であるところから，単字音系に存在する iəŋ に引き当てられたことを表している。[(4)] 河南夏邑の例はステージⅦの形式を重ね型にしたものと見なす。山東聊城の例は第一音節の“用”が陰平の調値を採っており，変調パターンも「去声＋軽声」のパターンとは合わず，「陰平＋軽声」のそれと一致しているという点が問題となる (p.50)。同音字彙で見ると“用”は yŋ^{313} (去声) となっており，陰平の又音はない (p. 47)。恐らくこの音節は“因”の特殊変化したものであろう。しかしながら“因故”という形式も書面語で「都合により」ほどの意味で用いられることはあるようであるが，“因為”の意味で常用語彙として存在する例は他に報告例が見られない。先に yŋ$^{13\text{-}131}$ u^{0} があって，これが同義語の“故”との間で「混交」(contamination) を起こして yŋ$^{13\text{-}131}$ ku^{0} となったと解釈する余地がある。上の推定変遷過程のステージⅥの聊城が（　）に括ってあるのは

現段階ではこのような可能性を排除できないからである。実際，“因故”本来の表記であって，これが特殊変化を起こして yŋ$^{13\text{-}131}$ ku^{0} → yŋ$^{13\text{-}131}$ u^{0}となったとの可能性も捨てきれない。もし河南夏邑の例を変遷過程に組み込めば，以下のようになる。

I		II		III		IV		V		VI		VII
iən uəi	→	iəŋ uəi	→	iəŋ uən	→	yəŋ uən	→	yəŋ yən	→	yəŋ yəŋ	→	yəŋ
		開封,新郷		徐州		徳州				夏邑		徐州

VIからVIIへは重ね型の一方の音節を省略すると見なすが，もし段階的に摩滅してゼロになる過程を推定するならば，VIからVIIへの変化は以下のように改めることになる。

VI								VII
yəŋ yəŋ	→	yəŋ yə	→	yəŋ uə	→	yəŋ u	→	yəŋ
夏邑						(聊城)		徐州

若しくは

VI								VII
yəŋ yəŋ	→	yəŋ yə	→	yəŋ y	→	yəŋ u	→	yəŋ
夏邑						(聊城)		徐州

第二音節のみを見るならば，発音労力が漸次増大し極限に達してから減少に転じるという変化が起こったことになる。この‘因為’に関しても，現時点では複数の変遷過程を想定できるが，やはりそのいずれであろうとも本来二音節語であったものが段階的に一音節の yəŋ という形式へと変化して行く傾向が見てとれる。なお棗強の例は恐らくミスプリであろう。yŋ iŋ とあるべきところであろうか。後続音節の音声表記になお疑念が残るので，類例として示すに留め，詳しくは論じない。鄒城の例もこれらの過程とは分けて論ずべきものであろう。今のところ類例が見られないので，他の可能性を排除できないが，とりあえず以下の如き過程を推定しておく。ここでは後続音節の脱落の傾向は見てとれない。

I		II		III
iən uəi	→	iən uən	→	i uən

4．'故　意'

河南洛陽：貴着/guìzhe/　　故意　　FPJ6/80　　←“故意着”

河南洛陽：故意兒 kuei^{33} iɯ^{3}　　研究188

いずれも洛陽方言の例であるが，所拠文献が異なる。内部差異を示すと考えてよかろう。今，第三音節を省略して変遷過程を推測すると次の如くである：ku i → kuəi i → kuəi

5．'多　咱'

北方方言では普通話の“甚麽時候”に当たる語彙が以下のような形式で現れている。これらのうちの一部，“多咱”，“多暫”，“多怎”などと表記されるものもこれまでに挙げた例と同じような過程で成立した可能性がある。

河北雄縣：多早晚兒/tuo$^{45\text{-}21}$ ze^{0} wanr^{213} [uer^{213}]/　　多會兒；甚麽時候　557

山東臨邑：多早晚兒　　甚麽時候　　齊魯927右

河南獲嘉：多暫 tuɤ^{53} tsan^{13}　　研究189

多暫往兒 tuɤ^{53} tsan^{13} uãr^{53}　　研究189

山東博山：多咱 tuə$^{214\text{-}24}$ tsã^{31}　　甚麽時候　　研究117

←“多早晚”或“多朝晚”

山東昌邑：多咱　　甚麽時候　　齊魯925右（＝山東泗水　齊魯926左）

河南洛陽：多咱午兒/duò zan wǔr/　　FPJ6/77

山東壽光：天多怎 tʰiæ̃^{213} tuə$^{53\text{-}34}$ tsə̃^{0}　　甚麽時候　　縣志467

多怎煞tuə$^{53\text{-}34}$ tsə̃^{0} ʂa^{213}　　哪一天　　縣志467

山東安丘：多喒 tuə^{24} tsẽ^{0}　　甚麽時候　　FPJ8/57

山東寒亭：多怎　　甚麽時候　　詞典62（＝山東坊子，安丘，壽光　詞典62）

山東平度：多曾 tuə$^{214\text{-}45}$ tθoŋ^{0}　　甚麽時候；幾時　　197

山東莒南：多自 tuə$^{213\text{-}21}$ tθɿ^{0}　　甚麽時候　　14

河南獲嘉：多旦 tuɤ^{53} tan^{13}（多讀上聲）　甚麽時候　研究189

多旦往兒 tuɤ^{53} tan^{13} uãr^{53}　研究189（＝河南衛輝645）

河南泌陽：多當往兒　多長時間　677

多往兒　①何時②多久　677

河南鎮平：多望兒/duɑng^{31} wɑngr^{0}/tuŋ^{42} uŋr^{0}　啥時　644

河南南召：多晚兒/duo^{34} wêr^{45}/tuo^{34} uɛr^{45}　甚麽時候　753

河南上蔡：多大晚兒/duo^{53} da^{31} wanr^{0}/　多長時間　644

多晚兒/duo^{53} wanr^{0}/　啥時間　644

河南内鄉：端宛兒/duan^{324} wanr^{0}/　啥時間　64

河南西平：多當晚兒 tuo^{53} taŋ^{24} uɑnr^{55}　甚麽時間　506

河南郾城：多當晚兒 tuo$^{24\text{-}42}$ taŋ^{0} uar^{55}　甚麽時間　506

河南新野：多當兒 tuo^{53} tar^{312}　甚麽時候　605

河南遂平：多當兒 tuo$^{213\text{-}42}$ tɜr^{412}　甚麽時候　FY89-2/90

河北魏縣：多大兒/duódàr/　甚麽時候　FPJ6/115

←“多早晚兒”或“多朝晚兒”？

山東肥城：多咱 tuo$^{214\text{-}24}$ tsã$^{313\text{-}21}$　多會兒　748

多旦 tuo$^{214\text{-}24}$ tã$^{313\text{-}21}$　（南部說法）　748

山東歷城：多旦　甚麽時候　齊魯917右　（＝山東章丘　齊魯932左）

山東東明：多點兒 tuə^{55} tər^{0}　甚麽時候　540

←“多早晚”或“多朝晚”？

河南長葛：多張晚兒/duo^{42} zhang^{24} wanr^{55}/　甚麽時間　506

河南鄧州：多張兒晚兒 tuo$^{44\text{-}53}$ tʂãr$^{312\text{-}213}$ uãr^{0}　甚麽時候　市志698

“多咱”については小川（1958）に“多早晚”が約まったものであるとの指摘がある。しかしながら方言によっては第二音節声母が ts- ではなく，t- となっている例がある（河南省に多く見られるようである）。それらの方

言においては ts>t の音韻変化が起こっている訳ではないので，“多早晩”を語源とするならば，何故如上の諸例において ts → t の変化が生じたのか説明する必要が生ずる。いわゆる「双声化」によるものと説明できそうであるが，以下の諸例を考慮に入れると“多朝晩”である可能性も排除できない。“朝”の声母（知母）が t- を痕跡的に保存している例とする見方である。この点について先に検討を加えておきたい。

河北大城：清早　　早晨　792

河北圍場：清早兒 tɕ^{h}iŋ^{55} tsaur^{214}　清晨　113　（＝河北灤平　978）

……

河北魏縣：清島/qīngdǎo/　早晨　FPJ6/11　←“清朝”

河北南和：滋當 ts^{h}ɿ^{55} taŋ^{0}　清晨　113　←“清朝”？

河南商丘：大清早 ta^{31} ts^{h}iŋ^{214} taɔ^{55}　縣志519

清早起 ts^{h}iŋ^{214} taɔ^{55} tɕ^{h}i^{0}

清早起來 ts^{h}iŋ^{214} taɔ^{55} tɕ^{h}i^{55} lai^{42}

河南開封：清□　ts^{h}iŋ^{24} tao^{44}　縣志539

河南遂平：清島tɕ^{h}iŋ^{213} tɔ^{42}　清晨　FY89-2/89

河南長葛：清到/qing^{24} dao^{21}/　早晨　619（＝河南臨潁　676，許昌市志625）

山西翼城：清到 tɕ^{h}ie$^{33-35}$ tɑu^{0}　清晨　104

河南長葛：清倒/qing^{24} dao^{55}/　早晨　576

河南許昌：清導 ts^{h}iŋ^{24} tau^{0}　早晨　省志186（＝河南濮陽市，周口市　省志186）

河南寧陵：清早起來/qing^{24} dao^{0} qi^{24} lai^{0}/　清晨 434

第二音節は“早”で書かれることが多いが，それ以外の表記も少なくない。本字が“早”でない可能性を示唆している。“早”は“朝”と意味的関連を持っているから，“清朝”を“清早”と表記するようになることは十分考えられる。もし如上の諸例と語源を同じくする語彙が広く分布して東南部

においても見られ，知母をt-とする例の少なくない方言においてこの音節の声母が“朝”と表記され，t-で現れているというのであれば，上記諸例の本字を“清朝”と見なしても差し支えなさそうである。しかし残念ながら，そのような例は見当たらない。東南部方言では「朝」を表す語彙は“天光”，“五更”などを語源（の主要部分）とすることが多く，“清早”に相当すると思われる同源語彙はあっても成立の新しいものである可能性がある。もしそれらが知母をts-若しくはtʂ-とする周辺方言からの借用であれば，手がかりとすることはできない。たとえ“多朝晩”が語源であったにせよ，なお問題は残る。知母にそり舌音の反映を持つ少なからぬ方言で第二音節声母がts-で現れている点を“朝”と“早”との混同で説明してよいものか，十分な検討を行っていない。現時点では“多早晩”/“多朝晩”，“清早”/“清朝”のいずれが本字であるのか現段階では判断できない。本来二つの語形が並存していて，それが錯綜して現在のようになったとも考え得る。“早”か“朝”かの判断を回避してこの音節については，便宜的に音声形式をt(s)auとしておく。今，末尾の“兒”を省略して先の“甚麼時候”の同源語彙の変遷過程を考えて見る。

I	II	III	IV	V
tuə t(s)au uan →	tuə t(s)an uan →	tuə t(s)an u →	tuə t(s)an →	tuə t(s)ən
臨邑	獲嘉	洛陽	獲嘉，博山	壽光，安丘（東明）

VI	VII
→ tuə t(s)ə →	tuə t(s)
（東明）	莒縣

河北雄県の例はtuə t(s)au uan → tuə t(s)ə uanのような過程を経て成立したものと考えられる。第三音節の韻母については所拠文献によると，/uan/が「児化」すると実際の音価は[uer]のようになるということらしい。「児化」によるこのような変化は体系的なもので，この語彙に限ったものではない。それゆえ「児化」を省いて考察する場合はひとまずこの第三音節の韻母の主母音はaのままにしておいて良い。山東東明は所拠文献によれば，

an, aŋ, əŋ は「児化」するといずれも ar となる。上掲例の東明方言の例は tər となっており，主母音が弱化していると考えて差し支えなかろう。但し「児化」しているため，本来の韻母が tən であるのか，tə であるのか判定できない。この弱化は或いは「児化」の後に生じたものかも知れない。山東莒南方言では精母は体系的に tθ で現れる。

河南方言にはこの推定で説明できないものがある。それらについては以下のような過程を想定すべきである。

I		II		III		IV		V
tuə t(s)au uan	→	tuə t(s)an uan	→	tuə t(s)aŋ uan	→	tuə t(s)aŋ	→	tuə t(s)ən
				西平，郾城		(新野，遂平)		(東明)

VI		VII
→ tuə t(s)ə	→	tuə t(s)
(東明)		

河南方言は「児化」によって先に挙げた山東東明方言に見られるような韻母の中和現象を起こすものが多い。新野，遂平方言もこのような特徴を持つ。それゆえ“多當兒”と漢字表記される形式の音価は“多旦兒”と漢字表記することも可能である。結局のところ tuə tan が「児化」した結果なのか，それとも tuə taŋ が「児化」した結果なのか判定のしようがない。いずれにせよ、‘多咱’についてもその構成要素の“早晩/朝晩”が連音変化を起こして第二音節が弱化してついにはゼロになる過程を想定することができる。

6．山東栄成方言の例

張（1982）に次のような例が挙がっている。

敢莫 kan^{213} muo^{213} → $kam^{213\text{-}232}$ $mə^{0}$ → kam^{232}　　也許　84

當麼 $taŋ^{22}$ $mə^{0}$ → tam^{22} $mə^{0}$ → tam^{22}　　當……的時候　84

cf. 當麼 tam (←$taŋ)^{22}$ $mə^{0}$　　如果。含待到……的時候的意思　128

栄成方言に関してはもう一点，王（1995）による綜合的な記述研究の報告がある。それにはこの二つの語彙が次のようになっている。

敢麼 kan$^{214\cdot35}$～kaŋ$^{214\text{-}35}$ mɔ^{0}　可能，或許　194

cf. 敢保 kan$^{214\text{-}35}$ pau^{214}　肯定　194

當麼 taŋ^{44} mɔ^{0}　很可能　194

前者については牟平方言にも似たような形式の報告が見られる。

敢麼 kan$^{213\text{-}53}$～kəŋ$^{213\text{-}53}$～kɑŋ$^{213\text{-}53}$ mɔ^{0}　可能，大概　145

既に指摘したことだが，[3] 漢語方言の記述研究を行う場合，通常は字音調査から開始してそれから語彙調査に進む。そのため調査者自身に語彙の音声表記に単字音形式を無批判に用いる傾向があり，インフォーマントにもまた複合語を単字に還元して考える傾向がある。その結果，例えば北方方言の複合語中で連音変化によって現れている -m 韻尾が，北方方言においては単字音系で -m が現れないために，-n，もしくは -ŋ の音節に同定されて処理される。本字が -n，もしくは -ŋ を持つものであることもまた少なくないので，このような処理が常に問題となる訳ではない。しかし当て字の場合にはこのような処理によって本字の引当を誤ることも十分ありうる。上掲の王（1995）の報告例の“敢麼”の kaŋ$^{214\text{-}35}$ はこの語構成にあっては実際には張（1982）の指摘するように kam$^{214\text{-}35}$ となっているのではないかと思われる。“敢麼”と“敢保”は恐らく「二重語」（doublet）であろう。それに対して“當麼”の方は張（1982）と王（1995）とで語釈に食い違いが見られ，同一の語彙と見なすのにややためらいを感じるが，意味の拡張もしくは内部差異を示すものと考える。本節で取り上げた二つの語彙の本来の語源がどうであったか，特に第二音節についてなお検討が必要であるが，ここでもやはり段階的に合音を形成したかのような様相を見てとることはできる。

7．‘大　概’

前節で取り上げた“敢莫”と同源語彙である可能性のあるものに以下の語がある。

天津漢沽：公着（估摸着）kuŋ^{34} tʂə^{0}　大約　926

河北満城：大估摸児 ta^{51} $ku\eta^{45}$ $mu\text{ə}r^{0}$　大約　FY88-2/112

河北固安：大估摸児 ta^{51} $ku\eta^{45}$ $mu^{214\text{-}21}$ $\text{ə}r^{0}$　大概　836

河北遵化：大估摸児 tA^{51} ku^{55} $mu\text{ɤ}r^{0}$　大概，大約　746

天津静海：大估摸児 $t\text{ɑ}^{31}$ ku^{43} mur^{113}　大概，大約　746

この本字をどう批定すべきかについてはなお検討を要するが，上掲例だけに限定して，接尾辞の要素と語頭の“大”を除いて変化の過程を推測するならば，河北遵化及び天津静海の形式から天津漢沽への直線的な推移を想定できる。

I		II		III		IV		V
ku m(u)ə	→	kum m(u)ə	→	kuŋ m(u)ə	→	kuŋ mu	→	kuŋ
遵化，静海				満城		固安		漢沽

満城の実際の形式はステージⅡに挙げたような形式ではないかと思うが，単字音形式への引き当てでⅢのように見なされることになったものと思われる。

8．とりあえずの結語

方言間の差異を見ると，段階的に一音節化する傾向が見てとれるが，個々の方言例の一音節語は必ずしも全てがこのように段階的に成立したのではないかもしれない。その可能性を排除するには更なるデータの集積が必要であろう。筆者の蒐集したこれまでのデータからは個別の特殊変化を生じた語彙がある一定の地域に集中して現れる例を見出すことはできるが，方言ごとの，若しくは地域ごとの音変化パターンの嗜好の違いというものを見てとることができない。しかしながら合音の現象に関しては，例えば山西省のいわゆる晋方言などでは「舒声促変」が合音成立に関与する場合がある。本稿で取り上げた見かけ上の合音を含め，合音を綜合的に検討するならば，反切の研究に益することもあるかも知れない。(5)

本稿では専ら北方方言を対象に音声的特徴から「語彙化」の過程について検討してきたが，第１節で指摘したように，本稿の例はいずれも第二音節が

弱化して最終的にはゼロになるものであった。このような過程が可能な背景には，軽声が通常の語構成では後続音節に現れるといった状況があると考えるべきであろう。ならば軽声が顕著ではない東南部の大方言には異なった「語彙化」の過程があるかもしれないということになるが，現時点では筆者の手元に十分なデータがないので，何とも言えない。この問題については今後の課題としたい。

注

(1) "倆"，"仨" については Chao（1936）及び太田辰夫（1953）が論じている。但し後者は "倆" についてのみ。数量詞が合音となる例は普通話では "一箇"，"兩箇" においてしか見られないが，河北，河南方言ではそれ以外の数詞と "箇" の結びつきにおいても見られる。

(2) "不用"，"不要" の合音については以下のような普通話と異なる反映が存在する。太田（1995a）p.164参照。

"不用"

河南洛陽：/bing/　FPJ6/17

"不要"

山東莒南：/bó/　FPJ6/17

河北巨鹿：piau^{31}　685

pau^{31}　685

青海西寧：pɔ^{214}(去)　253

山西萬榮：piɔu^{51}(陰平)　20

陝西延川：piɔ^{53}(去)　90　（＝山西原平　96）

(3)「語彙化」については『言語学大辞典 第6巻術語編』（三省堂　1996.1）に次のようにある。「やや多義的な用語であるが，通時言語学的には，2つ以上の形態的成分からなる形式が，その成分の意義と統語規則とだけからは予測のつかない意義をもつにいたること。したがって，語彙化は言い換えると無縁化（demotivation）の一種である。たとえば，現代日本語のマエ（前）は，上代のマ（目）＋へ（辺）の語彙化である……。一方，タチマチ（←立ち待ち），マスマス（←増す増す），キワメテ（←極め・て）などのように，語彙化とともに文法機能も変化することがある。……語彙化した形式とその通時的な構成成分との関係には，いくつかの段階がある。上に掲げたマエ，……のように，共時的には形態的成分への分析が不可能な形式を音声の面で進行した語彙化であるとすると，意味の面でもっとも進行した語彙化は……。」（p.514-515）語彙化にもいろいろあり，筆者がこれまで太田（1995abcd, 1996ab）などで紹介した連音変化によって成立した例外的字音も語彙化の現れであると言って良い。本稿で扱うのは上掲書で言う「音声の面で進行した語彙化」の一典型に見られる音声の面の変化のありようである。

(4)この引き当ての問題については「単字音形式と語彙音形式の乖離現象について」と題する口頭発表（日本中国語学会第49回全国大会　お茶の水女子大学　1999.10.31）で論じた。後にこの改定版「再び単字音形式と語彙音形式の乖離現象について」を京大中国語サークル（京都松ヶ崎会館　2000.5.13）で報告した。近い将来に論文として発表したいと考えている。

(5)反切用字選択上に見られる嗜好が学統による違いの反映であるにせよ，その反映の前提に合音形式のあり方の地域的差異があった可能性を考慮してみる価値はあるであろう。

参 考 文 献

Chao Yuenren A Note on lia, sa etc. Harvard Journal of Asiatic Studies Vol. I, No.1 1936 pp.33-38

太田 斎（1995a）「北方方言怪音例集 (1) —語流音変以及其他特殊音変—」『神戸市外国語大学外国学研究所 外国学研究（アジア言語論叢）』31 1995.3 pp.105-170

太田 斎（1995b）「北方方言怪音例集 (2) —語流音変以及其他特殊音変—」『神戸外大論叢』46-2 1995.9 pp.87-105

太田 斎（1995c）「北方方言怪音例集 (3) —語流音変以及其他特殊音変—」『神戸外大論叢』46-4 1995.9 pp.73-86

太田 斎（1995d）「北方方言怪音例集 (4) —語流音変以及其他特殊音変—」『神戸外大論叢』46-6 1995.11 pp.43-57

太田 斎（1996a）「北方方言怪音例集 (5) —語流音変以及其他特殊音変—」『神戸外大論叢』47-1～4 1996.6 pp.243-254

太田 斎（1996b）「北方方言怪音例集 (6) —語流音変以及其他特殊音変—」『神戸外大論叢』47-5, 6 1996.10 pp.75-87

太田辰夫（1953）「"哥兒倆" 考」『神戸外大論叢』3-4 後,『中国語文論集 語学篇』汲古書院 1995.5 pp.97-112 所収

小川環樹（1958）「多少と早晩」『東西学術研究所論叢』24 1958.3；後『中国語学研究』創文社 1977.3 p.185-199 所収

方 言 資 料

河北

大城：『大城縣志』編委會『大城縣志』華夏出版社 1995.12 pp.781-792

固安：固安縣志編纂委員會『固安縣志』中国人事出版社 1998.8 pp.829-836

巨鹿：巨鹿縣地方志編纂委員會『巨鹿縣志』文化藝術出版社 1994.5 pp.676-740

灤平：灤平縣志編委會『灤平縣志』遼海出版社 1997.11 pp.959-982

南和：河北省南和縣地方志編纂委員會『南和縣志』方志出版社 1996.12 pp.534-558

圍場：圍場縣志編纂委員會『圍場縣志』遼海出版社 1997.11 pp.95-115

雄縣：雄縣縣志編纂委員會『雄縣志』中國社會科學出版社 1992.12 pp.551-567

棗強：棗強縣地方志編纂委員會『棗強縣志』文化藝術出版社 1994.12 pp.839-880

遵化：遵化縣志編纂委員會『遵化縣志』河北人民出版社 1990.7 pp.586-624

河南

泌陽：泌陽縣地方志編纂委員會『泌陽縣志』中州古籍出版社 1994.10 pp.660-687

長葛：長葛縣志編纂委員會『長葛縣志』生活・讀書・新知 三聯書店 1992. 1 pp.611-625

開封：崔燦『河南省志第11巻 方言志』河南人民出版社 1995.11 285+5p.

林縣：崔燦『河南省志第11巻 方言志』河南人民出版社 1995.11 285+5p.

臨潁：臨潁縣志編纂委員會『臨潁縣志』中州古籍出版社　1996.10　p.671-686
南召：南召縣史志編纂委員會『南召縣志』中州古籍出版社　1995.9　p.1106-1120
内鄕：内鄕縣地方史志編纂委員會『内鄕縣志』生活・讀書・新知　三聯書店　pp.749-775
寧陵：寧陵縣地方史志編纂委員會『寧陵縣志』中州古籍出版社　1992.12　pp.417-436
濮陽：崔燦『河南省志第11巻　方言志』河南人民出版社　1995.11　285+5p.
商丘：崔燦『河南省志第11巻　方言志』河南人民出版社　1995.11　285+5p.
商丘縣志編纂委員會『商丘縣志』生活・讀書・新知　三聯書店　1991.3　pp.505-529
上蔡：上蔡縣地方史志編纂委員會『上蔡縣志』生活・讀書・新知　三聯書店　1995.6　pp.631-658
衛輝：衛輝市地方志編纂委員會『衛輝市志』生活・讀書・新知　三聯書店　1993.10　pp.621-654
新鄕：崔燦『河南省志第11巻　方言志』河南人民出版社　1995.11　285+5p
新野：新野縣史志編纂委員會『新野縣志』中州古籍出版社　1991.8　pp.591-615
許昌：許昌市地方志編纂委員會『許昌市志』南開大學出版社　1993.5　pp.622-629
崔燦『河南省志第11巻　方言志』河南人民出版社　1995.11　285+5p.
郾城：郾城縣地方史志編纂委員會『郾城縣志』中州古籍出版社　1993.6　pp.635-665
鎮平：鎮平縣地方史志編纂委員會『鎮平縣志』方志出版社　1998.11　pp.925-948
周口：崔燦『河南省志第11巻　方言志』河南人民出版社　1995.11　285+5p.

内蒙古
興安：興安盟地方志編纂委員會『興安盟志』内蒙古人民出版社　1997.5　pp.1043-1059

山東
安丘：董紹克 張家芝主編『山東方言詞典』語文出版社　1997.1　663p.
東明：山東省東明縣志編纂委員会『東明縣志』中華書局　1992.7　pp.532-552
坊子：董紹克 張家芝主編『山東方言詞典』語文出版社　1997.1　663p.
寒亭：董紹克 張家芝主編『山東方言詞典』語文出版社　1997.1　663p.
聊城：張鶴泉『聊城方言志』語文出版社　1995.8　198p.
榮成：王淑霞『榮成方言志』語文出版社　1995.2　247p.+1map
壽光：山東省壽光縣地方史志編纂委員会『壽光縣誌』中国大百科全書出版社　1992.11　pp.457-472
董紹克 張家芝主編『山東方言詞典』語文出版社　1997.1　663p.
新泰：高愼貴（1996）『新泰方言志』語文出版社　1996.4　235p.
沂水：張延興『沂水方言志』語文出版社　1999.4　250p.
兖州：山東省兖州市地方史志編纂委員会『兖州市志』山東人民出版社　1997.9　pp.835-864
鄒城：山東省鄒城市地方史志編纂委員会『鄒城市志』中国経済出版社　1995.12

pp.743-791

天津

漢沽：天津市漢沽区地方志編修委員会『天津市漢沽区志』天津市社会科学院出版社 1995.1 pp.908-929

静海：静海縣志編修委員会『天津市静海縣志』天津市社会科学院出版社 1995.10 pp.731-754